

バーサンスレン・ボロルマーさん (絵本作家)

絵本が届ける草原の風

社会主義時代のモンゴルに生まれ育った少女は、国が民主化へ移行する激動の時期に日本と出会い、絵本作家になった。草原に暮らす人々の姿を温かい視点で描いた絵本は二十冊を超え、日本のみならず海外でも親しまれている。異国に生きる絵本作家の思いを聞いた。

絵を描くときだけ泣き虫じゃなかった

——日本で絵本作家として活動するようになった経緯を教えてください。

二〇〇四年に福岡の国民文化祭上陽町絵本大会でグランプリをいただいて、応募作が出版されたことがきっかけです。女性たちが武器も持たずに邪悪なカラスから家と草原を守りぬくお話です(『モンゴルの黒い髪』石風社)。当時は日本語がわからなくて英語の文章で応募したのですが、審査員で絵本作家の長野ヒデ子先生

がすてきな日本語の文章に訳してくださいました。

その直後に野間国際絵本原画コンクールでも大賞をいただいて『ぼくのうちはゲル』(石風社)として出版され、日本語や絵本についてもっと学びたいという気持ちが高まってきました。そしてモンゴル文化芸術大学在学中に知り合った夫のイチンノロブ・ガンバートルと一緒に、二〇〇八年から文教大学教育学部に留学し、美術評論家の中川素子先生の研究生になったんです。中川先生は「絵本は小さな美術館」とよくおっしゃっていて、さまざまな絵本の作り方について勉強させていただきました。

留学を機に私とガンバーは日本で暮らすようになり、絵本を制作しながら、夏の間だけモンゴルに帰る生活を十年間しています。

——日本で暮らしてみても感じますか？

人が優しいですし、安心して住むことができる国で、いいことがいっぱいあります。とくに何でも時間どおりに進むのが素晴らしい。モンゴル人は時間にとってもルーズで、「モンゴルには二つの時間がある。午前と

午後だ」というジョークがあるくらいです(笑)。

初めて来日したときは、物が何でも小さくてびっくりしました。レストランに入るとご飯もコーラの量も少ないので、健康のためなのかなと思いました。あとは商店で、狭いスペースを器用に使って商品を陳列しているのにも驚きました。

最初のころ、私は日本人が何を言いたいのかがよくわからなくて、相手の意図を理解するのが大変でした。モンゴル人は自分の言いたいことをストレートに伝えるからです。でもいまではすっかり慣れました。

——九歳のときに初めて日本を訪れていますね。

運命なのでしょうが、私は子供のときから日本との深いつながりがありました。四歳から絵の教室に通い、六歳になると絵のコンクールに応募を始めて、九歳のときに在モンゴル日本大使館主催の「私が知っている日本」という子供絵画コンクールで優勝したんです。着物姿のほっそりした女性、富士山、水牛など五枚組の絵を出品しました。

その副賞で一九九一年の夏に日本へ招待されて、初めて訪れた日本では水牛がどこにもいなかったの不思議でした。水牛がいる日本の風景写真を本で見たい



●ばーさんすれん・ぼろるまー 1982年、ウランバートル生まれ。日本を拠点に絵本作家、イラストレーターとして活動している。『トヤのひっこし』(福音館書店)が平成28年度児童福祉文化賞受賞。おもな作品に『りゅうおうさまのたからもの』(福音館書店)、『ゴナンとかいぶつ』(偕成社)など。写真はモンゴルの草原で肩に鷹を乗せているボロルマーさん。